

特集 認知症を知る

あなたに寄り添う
その手がある



認知症。

いまや 85 歳以上の 4 人に 1 人がなりうるごく身近な病気です。
今後、認知症の人はますます増えるといわれており、「認知症になっても
安心して暮らせるまちづくり」が必要となっています。
本人や家族、周りの人には何が必要なのか。
今回の特集では認知症の人を支える人たちにスポットを当てました。

認知症を理解する

認知症疾患医療センターの役割

弘前愛成会病院（北園 1 丁目）では県の委託により認知症疾患医療センターを開設し、地域における認知症に関する専門的医療の提供と、医療と介護の連携を強化するための役割を担っています。認知症の治療はもちろん、家族からの相談のほか、他の医療機関、介護施設の紹介や依頼に対応しています。

認知症とは

脳の働きの中の認知機能に何らかの障がいが出て、日常生活に支障をきたす病気が認知症と呼ばれるもので、遺伝によるものもありますが、

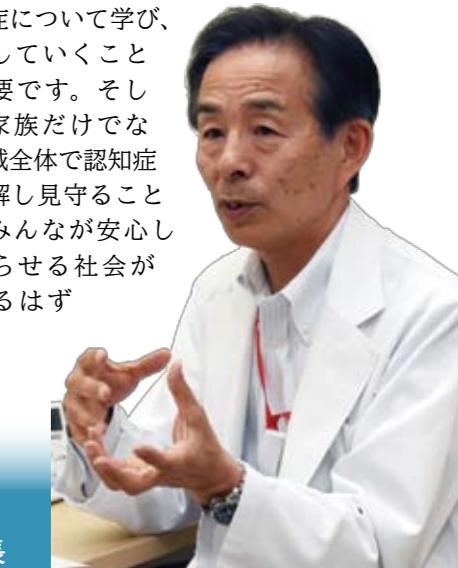
大きな原因是加齢によるものです。
また、単なる加齢によるもの忘れとは違って、例えば「朝ごはんに何を食べたか思い出せない」といった体験の一部を忘れるのではなく「朝ごはんを食べたこと自体忘れてしまう」という言動が現われたら、家族や周囲の人がいち早く感じ取り認知症を疑った方がいいでしょう。

認知症の治療はできるだけ早い段階で行なうことが効果的です。完治することはできませんが、その人に合った治療をすることで進行を遅らせることができます。

介護する側の支援も

治療と併せて家族への支援も重要です。介護者が楽な気持ちでいなければ、優しく接して介護することはできません。例えば、日中はデイサービスを利用し、少しでも介護する側が自分の時間を持てると、心に余裕が生まれ、お互いの関係性が良く

弘前愛成会病院
田崎 博一 院長



出典：公益社団法人 認知症の人と家族の会 ホームページ

家族がつくった 「認知症」早期発見のめやす

- 1. 今切ったばかりなのに、電話の相手の名前を忘れる
- 2. 同じことを何度も言う・問う・する
- 3. しまい忘れ・置き忘れが増え、いつも探し物をしている
- 4. 財布・通帳・衣類などを盗まれたと人を疑う
- 5. 料理・片付け・計算・運転などのミスが多くなった
- 6. 新しいことが覚えられない
- 7. 話のつじつまが合わない
- 8. テレビ番組の内容が理解できなくなつた
- 9. 約束の日時や場所を間違えるようになった
- 10. 慣れた道でも迷うことがある

もの忘れが
ひどい

判断・
理解力が
衰える

時間・
場所が
分からなくなる

- 11. ささいなことで怒りっぽくなつた
- 12. 周りへの気づかいがなくなり頑固になった
- 13. 自分の失敗を人のせいにする
- 14. 「このごろ様子がおかしい」と周囲から言われた

人柄が
変わった

- 15. ひとりになると怖がったり寂しがたりする
- 16. 外出時、持ち物を何度も確かめる
- 17. 「頭が変になった」と本人が訴える

不安感が
強い

- 18. 下着を替えず、身だしなみを構わなくなつた
- 19. 趣味や好きなテレビ番組に興味を示さなくなつた
- 20. ふさぎ込んで何をするのも億劫がりいやがる

※日常の暮らしの中で、認知症の始まりではないかと思われる言動を「認知症の人と家族の会」の会員の経験からまとめたものです。医学的な診断基準ではありませんが、暮らしの中での目安として参考にしてください。いくつか当てはまることがあれば、かかりつけ医などに相談してみましょう。